

Title	滝本博士五難説に就て：本庄博士著 『日本経済史概説』 第一分冊を読む
Sub Title	
Author	山本, 勝太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1928
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.22, No.7 (1928. 7) ,p.1005(131)- 1012(138)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280701-0131">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19280701-0131</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の紙幣發行銀行のその中最も完全なものであつて、それは合衆國の銀行業態及び間接には一般事業の推移を反映すること、該週報の最も重要な項目は Total bills and securities であつて、それは準備銀行によつて擴張された信用の全額を示すものであること等、これが分析的解説を加へて居るが、此等の諸點に就いては僅かに以上の雜記に止める。

以上は本書の梗概である。唯筆者の斷片簡略な紹介は十分其意を盡くさず、恐らくは讀者の了解に苦しまるゝ所多からんも、其點は十分に著者並に讀者の寛容を乞ふ次第である。本書が隨書に載せた五十一の地圖と圖解、十八の統計表及び各節末に附した其要點は讀者の了解を助くる所多大である。既に指摘した所であるが、本書に據つて斯制度そのもの、詳細を知らんとすることは無理である。去りながら、この制度の大體と其運用特に金融市場との關係を了解するには實に恰好に纏められたものであると信ずる。固より、其記述が殆んど紐育準備銀行を中心とせることに對する非難の如きは、若し之を加へる者ありとするも、其目的を失してゐる。何となれば、紐育金融市場は全國の中央市場であり、其處に所在する紐育準備銀行はこの制度上最も重要な地位を占むるものであるからである。終りに、本書は一般讀者の理解の爲に平易な記述を用ひて居るが、研究者を裨益する所亦大であらうと思はれる。(昭和三、六、十九)

## 瀧本博士五難說に就て

——本庄博士著『日本經濟史概說』第一分冊を讀む

山本勝太郎

嚮に『日本社會史』、『日本財政史』の二書を著して、通俗平易に之が説明を試み、以て時代人の讀書研究に多大の興味を起さしめたる經濟學博士本庄榮治郎氏が、今回さらに『日本經濟史』の著述を試みて、その概說の第一分冊を上梓せられ、さらに大衆教育のために盡されむとするは、余の深く敬意を表する所なり。既に法制史の研究にありては、かの中田薫博士の『法制史論集』三浦周行博士の『法制史の研究』等、權威ある學者の大著あり。然るに日本經濟史に至りては、師瀧本博士の『日本經濟史』——徳川氏封建制度の經濟的説明——と故内田銀藏博士遺著『日本經濟史の研究』の二書あるの外、未だ曾て學界に向けてその權威ある所説を發表せるもの一もあるなし。偶々日本經濟史何々若くは商業史云々等、類種の題名を以て出版せられたるものなきにしもあらずと雖も、而もそは大方草創期に於ける杜撰幼稚なる所説、若くは單に先考の所説を綴り合せて作れる教科書の範圍を出づるものに非ず。その甚しきに至りては大學の高職にあるものにして私かに先人の著述を藉りて、たゞ和書と譯以て自家の名を冠して恬然恥ぢざるものすらあり、余はひとり脾肉の嘆に堪えず、遂に自ら之が研究に精進を志せるに、今偶々本庄博士が『日本經濟史概說』と銘打つて、京都帝國大學に於ける講義案の公刊を企てられたるは、余の之ら不満に對する慰藉の料たるべく且は又多大の期待もて次卷以下の續刊を注目せむと欲する所以なり。

余が抱くところの之ら不満の事に就ては博士も又同感せらるゝ如し。一四頁以下二五頁に至る博士の所論は即ち之なり。されど内田銀藏博士の遺稿を集めたる『日本經濟史の研究』を以て未だ集大成せられずといふは些か穩當を欠くべし。成程同書は第一章何々、第一節何々とは分類せられず、然れども、上下二卷全體を通して之を熟讀すれば、恐らくは之までに刊行せられたる日本經濟史の類書中最も權威あるものにして、今を去ること略四半世紀の昔に於て、故博士が斯くの如き研究を果されしは、何人とも雖もその眞摯なる學者的態度と超人的努力とに對して敬服せざるものなかるべし。而もその説くところ、今日の學者の研討を以てするも、殆どその上に一步を出づるなし。たゞ僅に數個處に於てのみ、新研究に基きて多少の異論を挿むべきもの、發見せらるゝのみ。されば余は日本經濟史研究者に向つては常に必ず本書の一讀を薦む。博士曾てその『日本社會史』に於て、無條件にて内田博士の所説に従はれたるところ多きもまことに實なりといふべし。

福田徳三博士の『日本經濟史論』は(二四頁)屢々問題となる所の書なり。之れ他なし。同博士が余りに高名にして、世間一般の大衆の間にその名聲は殆ど偶像視せられ居るがためなり。余は曾て私かに、ブレンタノ教授が、博士の原著に對して日本人の曾て企てたる最も「科學的なる」研究との賞讃を與へられたりとし、而して同書譯者が、その卷頭に於て、異國にありて據るべきの書甚だ稀なるを、博士よく之を「靈感によりて」後時代の學者の研究と一致せるの奇蹟を説きたる兩文が同時に此の書の卷頭に載りたるを見て、思はず一驚を喫せしめられたる事あれど、今日熟々思ふに、本書こそは日本經濟學界が生みたる福田徳三博士の天才を最もよく表示せる所のものにして、初學者若くは一般世間の讀者の前に之を顯示せしめんか、その危険甚だ恐るべきものありと雖も、天才の説く所を聽かむとするには、博士の他の高著に傾聽するよりも、寧ろ却つて本書こそ最もその適しきもの也

といふべし。されば曾て本庄博士が、同書の中に見る福田博士の大氏小氏論に關して内田銀藏博士の説を藉りて之を否認せられたるに際して、それ以前に於て福田博士の右高説に惑はされて誤ちたる余は、(幸にして當時之を自己の書齋の外に出すことなかりしが)本庄博士の勞に酬むむものと、力を致して氏族制度を研討吟味せし事あり。然るにその結果は却つて『三田學會雜誌』第二十二卷第一號に於て發表せる卓見の如し。天才の犀利なる独自の見解は住々初學者を誤つこと甚だ大なりと雖も、而も常にそが獨斷論の裡に啓示する何ものかを含めるを知るべし。余は福田博士が、閑を割きて今一度『日本經濟史論』を吟味せられ、之をくわしく改訂補修し、以てわが日本經濟史のために、初學者を誤つことなき權威書を遺されむことを特に切望して止まざるなり。

福田博士大氏小氏説に對する『日本社會史』に於ける本庄博士の批評に似たるもの、即ち本書第四節、日本經濟史研究の困難と題せる所謂瀧本博士の五難説に對する批評の一文なり。實は『日本經濟史概説』は、未だその第一分冊の出でたるのみなれば、全卷の上梓を俟ちて之を論ずるを以て禮なりと信じたれば、暫らく博士の高説を伺ふのみにして至りしが、偶々この五難説に關聯して聊か平素、多くの學者の日本經濟史の研究に對する態度につきて慊らずと思ひ居る節々あり、さればこの機に於て之に關する卓見を開陳し、この不満をわれ人共に除去せむことは學徒その責に對する忠實の一斑ならむとも思考し、斯くて事の序に第一分冊全篇に對して聊か所見を述べむとするに至りしなり。博士幸にしてわれらが眞劍なる研究の立場を諒とし、事に關して高著を引用せるを許されよ。

余は今日に於ても猶所謂五難説には無條件にて同感を表さむとする者なり。成程本庄博士の云はるゝ如く徳川時代の文獻資料に就ては近時先考によりて幾多の便宜と啓蒙の勞を與へられたり。然れ共一步それ以前に溯らば、も早混沌として據るべきもの甚だ稀なり。僅に法文古文書の類の存續

せるありとするも、複雑多様な社会生活の研討を、單にその如き法文、古文書の類のみを以て類推し、解釋せむとするは不可なり。若しも經濟史の研究が、古文書の註釋と、法令の解義とを以て足るものなりとせば或は五難説中の主要なる二難若くは三難は自ら消滅せむ。されど余はかくの如き法令古記録の註釋陳列を指してこれを經濟史なりと稱するとも斷じて認むる事能はず、又それだけに眞正なる經濟史の作成し能はざるはもとより言ふ迄もなき事なり。かの異國の人々によりて企てられる幾多の日本研究に關する著書の、餘りに滑稽なるは、その罪の大半を之ら據るべき確實なる資料の欠如に歸し得べし。余は日本人として誤られたる國姿を傳へらるゝは不愉快なり。されば自ら欲する處の研鑽を完うしたる時は、直ちにそれらの誤謬論を悉く指摘訂正して眞正なる祖國の姿を表現し、以て日本人たるの一責務を果さむとの念願切なり。事左程に甚しきものあり。されば今日にありても猶余は常に研究資料の不足不備を切に嘆くものなり。殊に徳川時代を越ゆる以前の社會に於て然り。單に先人の説に盲從し、その甲をとり乙を援きて書き上げて事足るべき俗書の類に就ては暫らく云はず。苟くも學者眞劍の態度を以て其の責を果さむと欲するときは、いかにその資料の缺乏と、據るべきもの、不備とに惱まざるべき、到底盡す所に非ず。されば多くの學者、又一旦日本經濟史の研究に志すとも事未だその一端に觸れたるのみにして既に之を抛つもの甚だ多し。かの「郷土經濟史」の研究に至りては、この苦痛極端なるものあり。折角多大の憧憬と熱心なる努力ともて之が研鑽に當り、而も畢に果す事能はずして中絶したる學者その數に於て甚だ夥し。余の知れる限りに於てすら既にかくの如し。而も自らの體驗に顧みて、余は決して之を咎むる心なし。博士また一たび自ら創めて據るところの路を以て深く日本經濟史の研討を進められむか、然らば必ずやわれらと共にこの嘆きを深くせらるゝ所あらむ。

余は世間多くの初學者が、先人の所説の範圍に安居して、その作り得たる複製品を珍重するを咎めむとするには非ず。そも亦斯學研究發達の一助たらむ。されど學徒の責は決して著述にも非れば、且又良先生たるの職分にも非ず。深遠なる眞理の探究即ち之のみ。この見解よりして余は日本經濟史研究の、從來とかく輕視せられ、その研究に當りて敬虔ならざる者尠からざるに慚らざりし者なり。余は自己の據る所を明示し、自己の信ずる新なる所説の發見せられたるときに非ずむば、學徒はその所信を輕薄に發表すべきものに非ずと信ずる者なり。されば「日本經濟史」の容易く刊行せられざる、その研究の困難なるの必然的結果としてまことに實なり。かるが故に余はその刊行少きを憾むと雖も、而も多數の粗雑なるもの、又は複製商品の類の出現せむよりは、極めて眞摯なる少數の日本經濟史に關する研究書の現れむことを仰望して止まざる一人なり。

特に五難説中に述べられたりとする徳川時代の文獻の材料の雜駁と矛盾とに至りてはまことに痛切なる感あり。若し單純にその取捨撰擇を行はむか、時に數氏の所説を引きて得意たるも、豈果らむや、そは實は一個の主たる人の意見にして、他は悉く之に附和隨唱したるまでの事なごあり、之らこそは日本經濟史研究に當りて最も艱難なるものといふべし。而もかくの如く矛盾雜駁なりともその資料の存する限りに於てはまだまされり。その遠き時代に至りて、資料すら殆ど欠きたるに於て、今日の程度にありては、到底未だ五難の一も解決せられざるものといふべし。

以上は本庄博士が評せられたる五難説を讀みて、聊か平素抱くところの卑見を述ぶる機會を得むとしたるものなるが、恐らくかく解釋するときには博士も同じく共に五難の嘆を慨かるゝことならむ。余は常に博士が日本研究のために卒先筆をとられ、自ら第一線に起ちて努力奮闘せられむとするに對しては深厚なる敬意を表するものなり。されど余は博士がその「日本社會史」に於て指摘せられた

る瀧本博士、福田博士兩氏に對する異論に就ては、前に夫々別の機會に於て不快を覺えたる旨を述べたり。五難説の批評に於ても亦同じ。成程人は各々その見るところの立場を異にすべし。されど兩者時にありて右顧する者と左盼する者との間に所見を異にするは之を指摘して可なり。峠の人の見る所と麓にありて語る人との所見は之を對比するに由なし。博士が日本經濟史の研究を普及せしめ、一般化せしめむとの努力貢獻に對しては我らの感激を捧げむ所也。されどその立場よりして、他の學者の眞摯なる研究態度につきて評せらるゝに至りては之に賛成すること能はず。殊に博士が「帝大教授」若くは「經濟學博士」の肩書を有せられ、且高名なるに於てその片言隻語と雖も影響するところ甚だ大なるあり。かゝるが故に聊か五難の説に對して卑見を述べ、自ら顧みて耻づる所切なり。希くは博士この後この種の異論批評を止められ、たゞ一意眞摯なる研鑽に精進するものをして餘事に心を勞せしめざらむことを

されど余は、博士の先考に對するこれらの異論の事を除きては、幾多の點に於て多大の敬意を表するものなり。この度刊行せられたる第一分冊に於ても特に共鳴すべき二三の點なしとせず。例之四八頁に於て述べられたる「研究の材料」に於ける博士の意見の如きはその一也。斯く如きは、從來の「註釋的經濟史」の舊套を脱して、科學的研究への一躍躍を爲す所の方法にして、特にわが中世以前の經濟史研究に於て、時代文藝を離れては到底その眞姿を描くこと不可能なるを見るとき一層切實に感ずる所ならむ。經濟史に於ける研究範圍を最も廣義に解釋せらるゝ瀧本博士の門に學べるものとして、且又自ら新經濟史觀に據る者として、余はこの一節に對しては甚だなる喜びを以て接したる次第なり。

次に博士が、その第四章、政治社會組織の變遷、第一節、氏族制度の社會、その一「氏族の構成」

の所に於て「我國上古に於ける政治社會組織の根柢をなせしものは氏族制度である。この制度も勿論漸次整ふに至つたものであるがそれが十分に發達したときの形、即ち標本的のものについて考ふるに」云々と記されたるは余の最も敬虔の心もて迎へたる所なり。博士は會て『日本社會史』に於て、この政治社會組織の變遷を氏族制度の社會、郡縣制度の社會、莊園制度の社會、分權的封建制度の社會、集權的封建制度の社會(今回はさらに之に立憲政治の社會を加へられたり)に區別せられたるが、今回もそれを引用して説明せられたり。然るに前書に據るときは、この最初の氏族制度の社會といふがわが古代社會の説明に當るもの、如く思惟せられ、博士の論法も又その如く記されたれば、余は、そこに於ける博士の氏族構成の説明が、概ね大日本古文書等を中心とせる、奈良朝中期の状態並に大化改新後大寶令に至る時代の有様に、神武以降古代中期に及ぶ有様とを混合したる妙なものなりしかば、之亦初學者を惑す所甚しきを見、一旦三田學會雜誌第二十二卷第一號一四〇頁に於て特にこの點を註し置きたるが(之は近く上梓せらるべき拙著『日本經濟史』の中に收めたり)果して博士がわれらの注意をうけられたるや、或は博士自身の古代社會研究を更に重ねられたる結果修訂されたるやは知らず、從來の所見を斷然かく註して讀者の誤解を除くの一助とせられしはいかにもその眞摯なる學者的態度に對して深厚なる敬意を表さむと欲する處也。『日本社會史』の方も近く訂正せらるゝ事と信ずるが、希くばこれらの點に關する大衆の誤解を全然削除せむがために、博士がさらに一步を進めて、古代社會の氏族制度に就て獨自の見解を立てられ、これを以て第一項に代へられむことを切望して止まず。且はかくの如く區分せられたる六時代相互間の過渡推移の史的經過に就て博士の高説を欲する者也。分冊完了の上、改めて單行本として發行せらるゝの日に於ては、以上の諸點に就て十分留意せられ、これらの希望に對して折角示教あらむことを待つ。

而してこは單にこの章節に對するのみに非ず、同じ事を第五章、聚落の發達に關する説明に關しても言ふを得べし。余は從來學者が、之らの順序をとかく曖昧のまゝに看過し、突如各時代の特徴を述べて、敢てその史的經過に關する説明をなほざりにし居るを常に怪慚に堪えざるなり。而もこの説明こそ經濟史本來の職責にして、かくの如き困難なる研討考究こそ學徒本正の責務ならずや。余は第二分冊以下の完結を待ちて、これらの點に關する博士の愈々眞摯なる新研究の結果を伺はむと欲す。茲にはたゞ師の所謂五難說に對する博士の批評を見て、『日本經濟史』研究に對する平素抱くところの卑見を述ぶるに好機會と信じ、聊かその事に關聯して缺禮を重ねたる次第なり。若しも以上の一文が却つて博士の勳を述ぶる事少くしてその然らざる點を指摘すること多きにあらむか、然らばそはたゞ余一個の不徳の致す所のみ。『日本經濟史』に對する眞摯なる一學究の文辭、幸にして之を諒爾せられむことを――。

## 森耕二郎著「勞賃學說の史的發展」

小 泉 信 三

著者が前年公にした「リカアド價值論の研究」は先進學者の研究の綿密なる涉獵に基づき、而かも其間幾多の獨創的なる工風の跡を示せる、リカアド研究者の看過すべからざる著作であつたが(本誌第二十卷第三號に三邊教授の紹介あり) 森氏は更に標記題目の下に其前著と關係淺からざる賃銀學說の發展に就いて其研究の成果を發表せられた。本書は全篇を分つて六章となし、時代からいへば、フイジオクラアトから最近のクラアク、マアシヤル等に至る賃銀學說の發展を叙し、且つ之に批判を加へたものである。右六章の標題を順次に記せば、フイジオクラアトの勞賃論と純收入説「アダム・スミスの勞賃論と價值論」「リカアドの勞賃論とマルサスの人口原理」「勞賃基金説と勞働組合運動」「マルクスの勞賃論と資本蓄積の法則」及び「生産力説と勞働生産力の概念」であるが、右の中紙數を費すこと多き點からしても、又その文字の精彩に富める點からしても、著者の最も力を用ゐたのはリカアド・マルサスに關し及びマルクスに關する第三第五の二章であつて、アダム・スミスを論ずる第二章が此に次ぐものゝ如く察せられる。

著者は賃銀學說の全體を大別して(イ)生存費説(ロ)勞賃基金説(需要供給説)及び(ハ)生産力説となすものゝ如くである。尤も此類別は「最も人口に膾炙し、又最も多くの學者の用ゆるところの種別系列」として擧げられたものではあるが(五頁)併し著者は大體此類別を承認してゐるやうに見受けられる。而して(イ)を主張するものはフイジオクラアト、アダム・スミス(「斯様にスミスの勞賃論